

令和6年度

北海道教育大学  
附属函館幼稚園だより  
NO. 9【号】



## どんぐり

北海道教育大学附属函館幼稚園長 五十嵐 靖夫

園庭で遊んでいる時に「見て!」と言って、園児が手のひらにのせた3個のどんぐりを見せてくれました。つやつやのきれいなどんぐりでした。思わず「1個ちょうだい」と言うと、園児は、ちょっと考えた後に「自分で拾いなさい」と言いました。確かに・・・園児の言う通りです。

後で、その様子を見ていた担任の先生から、その園児が10個以上拾ったどんぐりの中からきれいなものを選び、さらに丁寧に磨いて、つやつやにしたどんぐり3個だったことを教えてもらいました。園児にとっては、とても大切な宝物だったのかもしれませんが、そのどんぐりを安易に「ちょうだい」と言ってしまったことを後悔しました。

園児たちが遊んでいる中で「貸して」「ちょうだい」と言っている場面を見ます。あげない子を見ると私なら「貸してあげたらどう」「1個くらいあげたらどう」と言ってしまうようになります。でも、貸さない、あげない子どもには、その子が大切にしている「何か」があるのかもしれませんが。その「何か」に気づくことが、とても大切なのだと園児が教えてくれました。私の恩師の先生が口癖のように「子どもに学ぶ」とおっしゃっていたことを思い出しました。

哲学者の林竹二先生は著書「教育の再生をもとめて」の中で「いまの学校教育は子どもの深いところにしまいこんである宝をさぐりあて、掘りだす仕事をすてて、教えるべきものと決めたものを教えこんで、どれだけそれを覚えたかをテストして、その結果によって、子どもを評価し、格づけして、学校の価値秩序のなかに組みこむ」と述べられています。さらに林先生は「何よりも大事な子どものころが見えること・・・子どものうちにかすかに動いているものや、こ とばにならない思いを感じとる人間的な資質が、今の教師にない」と嘆かれています。

子どもが深いところにしまいこんでいる宝をさぐりあてることも、子どものころが見えることも簡単ではありません。でも、そういう教師になりたいと願い、日々悩み、考えることは続けていきたいと思います。